

凡ノ物ナリ先ツ之ノ依頼スヘキナリ形ノ法ヲ設
ケテ金ヲ蓄リ彼ノ於テ抗斂ノモノヲ馳リ速カ
ク安心生計ノ地ニ赴カシムル仁術ニシテ實ニ天下
良金ノ好策ナランカ且ル庶民ヲシテ土地ニ有金
而返ナカラシムルノ道ニ行旅ノ便ヲ得セシムル如ク
依テ惟ニ二巻ノ末夕國ニ送ルルモノハ耕稼ノ
心ヲ安ラケサレハナリト云フニ列ノ制ハ郡縣制建
シハナリ百工亦然リ各其善職ヲ用テハ國以テス

道民多カラシム是故ニ先ツ有金石道ヲ通スルノ
道ヲ立ルハ方今ノ急務ナリ若シ今ニシテ其職ヲ
失シ各自其行ヲ散布スルノ後ニ到シハ又其善
ヲ得ス道ニ有金石群ヲ臨ラシムル外術ナラン
察セシハアル可ラス是ヲ以テ午報募金ノ法
則ヲたテ奉ケテ速カク採納アラシムル者望ム

第一則

一 東京ヨリ陸奥ノ青森迄里程凡ハ百里法道ヲ

建築ノ入用一里五万兩程ヲ以テ一千兩ヲ
以テ切取スヘシ

第二則

右建築ノ用金ヲ募ルニ身代ノ賣出可シキ身
形ノ利足年一割ト定メ身代ノ賣出廿日ヨリ
月々取拂キ要ス然レ月々受取キ以テ積目集ト
スルテ隔月ニシテ二季ニ法五ノ五好任シテ
好ナシ

第三則

遠方ノ者其地方ノ府縣ニ於テ是ヲ官商
ニ利合テ法五ノ五亦好リ

第四則

身代ノ賣一ノ七ノ若キ身代人ニ讓ルテアルモ
好ケナシ只身代所持一ノ七ヲ以テ法五トス

第五則

設有テ身代ノ元金引取云々ハ申出シ日

ヨリ十五日の内、引移後、之に後、金、五百兩、之金、
ノ内、ヨリ二百五十拾兩、引移、ノ受、之、之、始、ナシ

第六則

鐵道會、成、切、流、車、運、轉、ノ、六、日、之、其、利、
等、得、ル、ノ、以、定、ナ、レ、ハ、是、之、於、手、利、金、
政府、ヨリ、拂、ハ、ナ、シ

第七則

鐵道會、切、流、車、運、轉、至、レ、ハ、日、々、ノ、利、金、下

入、費、ト、月、末、ニ、平、ノ、新、聞、紙、子、以、テ、布、告、ス、ハ、シ

第八則

鐵道會、切、流、車、一、切、ノ、用、高、ハ、成、功、ノ、之、布、告、之、
政府、之、拂、後、世、之、利、金、之、者、之、故、有、テ、手、利、
引、移、之、者、之、立、留、置、之、ハ、成、功、ノ、之、者、金、ノ、
内、ヨリ、之、人、其、之、利、金、引、取、ハ、シ

第九則

鐵道會、切、流、車、始、メ、テ、五、里、或、ハ、十、里、者、其、之、

于新々よりステーシヨシ中軍を行旅し後
得せし先ツ其運送は子収手取し利金
充ルヲ要ス也昔時ハ今年二十里運送
自出明年は少しハ之三倍スル運送ヲ得ハシ

未九月

工部省
所設所

高鴻士如長

上書

横原
高鴻士如長

114
A 2855
2

大正十一年四月
隈侯爵郵寄贈

世ノ事難易輕重ヲ論ヤク渾ニ以微ニ投スレハ
成モ也今ノ時ニ當リ天下之牧伯其因ヲ奉テ
列藩ノ卿士其録ヲ辭シ農ニ歸セサレハ高ニ帰セン
尔ルニ其業ヲ知ラズ其道ヲ弁ユサレハ必以テ猶豫
狐疑ニ連ニ其進止ヲトスルヲ得ズ皆只安心ノ
地ヲ得ント欲スルニ是 政府許多ノ金ヲ費サ
ス鉄道ノ大業ヲ達スルノ秋也先ツ衆ノ依頼スヘキ

手秋ノ法ヲ設ケテ金ヲ爲分リ彼ノ猶疑執疑ノ者
ヲ驅リ速カニ安心生計ノ地ニ赴カシムル仁術ニ
シテ實ハ上下良人至ノ策且方今開化ノ進ノ際ニ
於テ人ノ困ニ餘ル勢ハ自然ノ理ニテ已ニ士ノ餘ル者
ハ農商ニ歸シ農工ヲ篤械ヲ以テ耕耘ヲ勤ムレハ
又アマリ医術ノ開クヤ夭者少ク種痘ノ行ワ
ルマ廢者少ク皆已ニ餘ルノ時ニ臨ヌリ此時ニ

於テ有餘不足相扶ケ鉄道開拓鑛山等ノ
事業ヲ起サスハ奏爾タル冗民空シク飢餓ニ
至ル外術ナカラシ若今テノ操ヲ失スレハ各自
其貯ヲ散布シ相共ニ濟ヲ得スル貧民ノ群ニ
陷ラシメントス察セズンハ有可ラス是ヲ以テ手秋ヲ
暮金ノ法則ヲ尤ニ奉テ速ニ濟採用アラシム
ヲ希望ス

一 東京ヨリ陸奥青森迄凡二百里を量り入用
 五萬兩ノ積リ此を一萬兩ノ手形ヲ賣ル
 一 手形ヲ賣ラシニ六年一割ノ利息ヲ賣出セシ月
 ヲリ月々相拂フヲ要スルニ月々積取ヲ煩累
 スル者ハ隔月或ハ二季ニ積トルモ其好ニ任セテ
 妨ナシ

一 遠國ノ者ハ其地方ノ二府縣ニ於テ是ヲ賣

渡ス其利分ヲ諸取モ亦然リ

一 手形ヲ買シ者若クハ手形ヲ餘人ニ譲ルト右トモ
 妨ケナシ只手形所持ノ者ヲ以テ訖トス

一 故有テ手形ヲ元金ニ引替タキ者ハ申出シ日ヨリ
 十五日ノ中引替渡スベシ仮令ハ五百兩元手形ノ内
 二百五十兩引替シモ妨ケナシ

一 鉄道全ク成切ノ上蒸氣車運轉日ヨリ其利

益ヲ得ルノ必定ナレハ年取ノ利金ハ政府ヨリ
払フナリ

一 鉄道成切ガ其年車運轉ニ至レハ日ノ利益ト
入費ト八月末ニ至リ新聞紙ヲ以テ布告スベシ

一 鉄道成切ガ其年一切之入用高ハ成切ノ上布告
シ 政府ニテ拂渡セシ利息ニ至リ年々故有テ子
取引替タノ立替置シ金高成切ノ上ニモ残レル

此ハ益多ク申ノ象人ト共ニ其利益ヲ引取ルヘシ

一 鉄道東京が初年名額ト達セントスルニ十ヶ月ヲ

以テ成切トス或ハ五里或ハ十里出来大ケ萬里車

運轉サセ其運賃ヲ收メテ子取ノ利益ノ方ニ補フ

ヲ要ス

未九月

横濱

高島嘉右衛門

建言書

高島嘉右衛門

414
A.285
3

御一新之際天下之牧伯命ヲ軍門ニ掛ケ萬死ヲ拔
テ大切ヲ立漸ク平定ノ期ニ及ヒ更ニ御賞典ノ
降ルヲ待ス直ニ數百世相續スル我本領ヲ奉還シ
相争テ郡縣ノ命ヲ待ツ實ニ國家ニ忠且切ナル者
ニ非スシハ能ハサルナリ私不肖ト云凡幸ト賢明在上ノ
時ニ遭遇シ苟モ細利ニ汲々トシテ身世ヲ保スルヲ
要セス然ルニ微々タル一商估ノカラ以テ如何ソ能ク
國家ノ盛事業ニ及フヲ得ンヤ只御國恩万

大正十一年四月
天隈侯爵郵寄贈

今一ヲ七報シ奉ント欲シ去々年三月始テ商税
ヲ奉獻シ去年鐵車道ノ為ノ横濱石寄ヨリ神
奈川青木町マテ自費ヲ以テ海底ヲ埋立テ日ヲ期シ
築造シテ之ヲ奉シ尋ヒテ瓦斯燈ノ事業ニ取掛リ
是又什ノ七八迄出来又市学校ヲ造立セシ等白口
ヲ以為ラク是皆鎖々タル事業争カ彦伯國ヲ
拳テ 朝恩ニ報ユルニ比較セシマ只開化ノ時機ニ
後ルセ間ノ豪富ヲシテ鼓舞奮發セシメント

スルナリ去秋又々陸奥青盛迄鐵道築造ノ儀ヲ
建白セシカ是實ニ

皇國ノ盛事未曾有ノ大業ナレハ敢テ平雨ニ企
ヘキニアラス然リト云凡今北邊御完拓ノ時ニ方リ其道ヲ
求メスシテ進ムトキハ滂シテ以テ切少ナクシテラ辟言レハ
瓶中ノ花ヲ養フカ如ク其根ヲ固フセスニ決シテ
其實ヲ結ハシム可ラス方今門閥ノ廢セラレタル
ヨリ士族已ニ國ニ余リ農工モ又其器械ニ依ルハ其

半ハ溢民トナリ近來種痘ノ法行ハレテヨリ世ノ
天死ヲ濟ヒ良一医輩出シテ猥リニ人命ヲ害セス
然ルニ猶人民融通ノ道ヲ開カスハ蝨蝨雨タル溢民
餓テ死セサルヲ得ス曾テ聞英米ノ他國溢民
ヲ買テ以テ我カ開墾ノ事業ヲ助ケト今東北ノ
地方ニ於テハ東京ヲ距ル一僅カニ一百里ニ過キスニテ
平原廣野而已打續キ更ニ人跡ヲタモ見サル所
アリ我

皇國内之人民今ヲ去地ニ有金スルニ至シハ亦已ヲ得ス然リト
云トモ猶是ヲ濟フノ術ナシトセス況ニヤ豊饒ノ土地且
數百里ノ遠キ徒ラニ不名トシテ耕サシメサルニ於テヤ蓋
シ恐ラクハ其道ニ依ラサレハナクニ語ニ云ク國ニ~~民~~^施民多キハ
上ニ良吏ナキナリト昌今賢哲位ニ在マシ然ラニテ其事ニ
及ハサルモノハ蓋シ創業多キ事ノ時ニシテ殆ト金額ヲ募
ルノ道ヲ欠ナラニ是故ニ青盛迄鐵道ヲ通スル築造ノ費
累ハ曾テ建白セシ蒸餾車手形ノ法ニ於テ現ニ西洋諸

州ニ相用ユル^仕法ニテ聊カ是レニ異ナル所ハ彼我未ク情
實ノ同シカラサルニヨリ手形金ノ返濟ニ於テ成業ノ時ヲ
期セズ其者ノ望ミニ任スモハ但手形ノ依頼スヘキ會
社ノ信スヘキヲ證スルナリ此ノ鐵道漸ク青成迄通ス
ニ至レハ同所ヨリ箱館迄蒸氣通船ヲ以テ彼是ノ往來
ヲ得セシメ尋ビテ室蘭ニ達シ同所ヨリ札幌正亦鐵道
通シ以テ東北ノ氣脈ヲ全國中ニ相通シ然シテ我カ泰
爾タル溢民ヲ驅リ朝ニ北隅ノ地方ニ稼キ夕ヘニ東西ノ
都府ニ乘躰クノ使ヲ得セシメハ土ニ不毛ノ地ナク海ニ徒
腐ノ物ナク國ニ無用ノ人ナク蝦夷ノ開拓モ立テ待ツヘク
東北ノ物産モ坐シテ致スヘキナリ曰緋橫濱港ニ於テ
建立セシ市學校僅ニ一ニヶ月ノ間ニシテ生徒ノ數殆ト
百有餘人其什ノ二ハ貧生ヲ教育セリ是貧生中英語
熟達ノ者ヲ撰ミ時宜ニ因リ支那ノ風格ヲ擬シテ以テ
我カ蝦夷ノ國祖トシ貴重セル昆布干魚ノ類ヲシテコレヲ
中華ノ諸州ニ出稼キセシメ彼ノ南京坊主ヲシテ我カ

各港ニ於テ好猶ヲ恐マ、ニスルヲ得セスハ豈快事
ナラスヤ鐵道數百里ノ費用ヲシテ終ニハ于魚昆
布ノ類、桑茶葉ノ如キヲ以テ能ク之ヲ贖ヲ得ハ
亦盛事ナラスヤ仰キ願ハ人事ノカヲ極テ造物師ノ
功用ニ先^カチ一時モ完化爲ニ猶^カ給ハスハ幾ハ各國
並立ノ秋ヲモ期ニテ待ヘケンカ私實ニ不肖ト云ヘ比柳
鐵道御創業、所用向ニ關係仕リ身ヲ致シテ完化ノ
即時運ニ進^カ之懼^カ微衷ノ程御憐察立成下東北
鐵車道ノ儀御評決、上ハ奔走ノ所用向被
仰旨^カ下^カ至^カ度奉懇願、以^カ恐惶謹言

申三月

高島嘉右衛門

